

## 消 息

## 晝間文彦先生をお送りするにあたって

晝間文彦先生は、2017年3月末をもって早稲田大学をご定年退職されました。先生のご退職にあたり、商学部教員を代表してご挨拶させていただきます。

先生は、1969年に早稲田大学商学部を卒業され、その後、大学院商学研究科修士課程と博士後期課程に進学されました。1973年に商学部助手、76年に専任講師、82年に助教授そして87年に教授に昇任されました。その間、1977年から80年まで、米国シカゴ大学にフルブライト全学給費生として留学され、同大学経済学研究科博士課程で修士号を取得されています。

学内においては、商学部学生担当教務副主任、産業経営研究所所長、商学学術院総合研究所長などの役職をお務めになり、学外においては、日本金融学会常任理事、行動経済学会理事、生活経済学会理事、(財)日本クレジットカウンセリング協会評議員、(社)日本クレジット協会理事、財務省財務総合政策研究所特別研究官などを歴任されました。

ご著書、論文などの研究業績につきましては、『早稲田商学』本号の「消息」をご参照頂きたいと思えます。研究業績に関して一言申し上げますと、先生は、学術的な論文・単行本の他に、一般読者向けの雑誌や新聞などにも寄稿されています。これは、金融論の学術的発展と専門的研究にとどまらず、ひろく一般読者を啓蒙するという面でもご貢献されたということです。早稲田大学教旨のひとつである「学間の活用」とは、こうした啓蒙的活動も意味しており、晝間先生はまさにそうした本学教旨を実践されたといえます。

先生の研究者としての来歴を一言で要約するならば、「つねに最先端の研究に取り組まれた」ということになると思います。私は、晝間先生の業績を専門の立場から申し上げることはできませんが、広田先生が執筆された消息にも、そうした旨の記述がありますので、間違いないと思います。ひとつだけ個人的な経験を申し上げますと、旧学部教授会時における雑談（本来は慎むべきことではと思いますが、教員間の知的交流という点では

意味があると思います)のなかで、先生から「最近は、経済学でも実験をするようになってるんだよ」「従来の経済学の方法とは違うんで、勉強することが多いんだ」というお話を伺いました。いまは日本国内でも、実験経済学、行動経済学などの書籍を多く見かけるようになりましたが、当時はまだそうした分野は世間では認知されていませんでした。そうした状況下において、先生は、多くの研究者が目にする前からいち早くこの分野の研究に取り組んでおられたわけで、まさに日本の金融論研究の最先端を歩まれたといえます。

他方、教育者としての晝間先生は、どちらかといえば温和でやさしい先生であったのではないかと推察致します。ふだんのお付き合いからして、先生が学生を厳しく叱る姿は想像しにくいというのが偽らざるところです。とはいえ、静かにしかし時に厳しく、学生達をご指導頂いたものと思います。

私的な事柄で恐縮ですが、晝間先生と残念ながら昨年ご逝去された広瀬先生とは、専門分野は異なりますが、学外の研究会でご一緒する時期がありました。研究会後は、当然のように紅灯の巷に繰り出すのですが、いくどかカラオケに行く機会がありました。先生は若々しいテナーで1970年代のニューミュージック(いまでは、まったく「ニュー」ではありませんが)を歌っておられたのが印象に残っております。

早稲田大学の規程では、心身ともにご健康であったとしても、満70歳になった年度末をもって、大学の教壇に立つことはできません。この規程に従って、晝間先生は、3月をもって早稲田大学商学部の教壇を去られましたが、研究者としての人生に定年はありません。晝間先生のこれまでの早稲田大学とくに商学部に対するご貢献に深甚なる感謝の意を表するとともに、今後ともご健康に恵まれ、いつまでも研究に携われることを祈念して、私の送別の辞とさせていただきます。

早稲田商学同攻会長

藤田 誠